小西甚一著「基本古語辞典［新装版］」―「をかし」「おもしろし」「かなし」の意味とは― 大修館書店 2011 年 4 月 1 日刊を読む

１．をか・し

①おもしろい。興味がもたれる。「心々に争ふ口つきども(＝女房タチノ口ノキキ方)を―・しと聞こしめして」〔源氏・絵合〕

②趣ふかい。風情(ふぜい)がある。「月の夜は閨(ねや)の内ながらも思へるこそ、いと願もしう―・しけれ」〔徒然・一三七段〕

③㋑すばらしい。すぐれている。「琴に作りてさまざまなる音の出でくるなどは、―・しなど世の常にいふべくやはある(＝ステキダナドトイウ月並ミナ言イ方デハ追ッツカナイ)」〔枕・三七段〕

㋺うまいぐあいだ。ちょうどよい。「足音すれば、『さにぞあなる(＝アノ人ミタイダワ)。あれは(＝マア)、―・しく来たるは(＝ヨク来タコト)』と…うち言へば」〔蜻蛉・中〕

④きれいだ。美しい。「姫宮は…あてやかに―・しくおはするに(＝上品デオキレイデイラツシャルウエニ)」〔栄花・月宴〕

⑤(中世以後)こっけいだ。ばかげている。「(遊女タチガ祇王ニアヤカロウト)祇一・祇二・祇三・祇福・祇徳など名をつけけるこそ―・しけれ」〔盛衰・巻一七ノ二〕

⑥(近世語)へんだ。正常でない。「すべて、古風家(＝古イスタイルノ歌ヲヨム人ガ)、後世風をばいみじく(＝ヒドク)嫌ひながら、みづから後世風の混雑することをえ知らざるは、―・しきことなり」〔宣長・初山踏〕

P.580

２．おも・しろ・し

①(けしきや品物などが)みごとだ。すばらしい。「十日あまりなれば、月―・し」〔土佐〕

②趣が深い。「その院、昔を思ひやりてみれば―・かりける所なり」〔土佐〕

③愉快だ。興味がある。「学問をしはべりし時に、ここち常に―・く、頼もしく、思ふこと(＝心配ゴトハ)なくはべりし」〔宇津保・国譲下〕「もてはやし興じ申したまふやうにもてなしつつ、みづから下襲(したがさね)の後(しり)はさみて(馬ニ)乗りたまひぬ。さばかり(＝アンナニ)狭き壺(＝内庭)に折り回し(グルグル方向ヲカエ)―・くあげたまへば(＝乗り終エラレタノデ)」〔大鏡・伊尹〕

P.99

３．かな・し

1〈愛し〉①しみじみとかわいい。いとしい。「多摩川に晒(さら)す手作りさらさらに何そこの児のここだ(＝ヒドク)―・しき」〔万葉・巻一四〕「―・しき妻子(めこ)の顔をも見で」〔源氏・明石〕

②感動的だ。興味ぶかい。「みちのくはいづくはあれど(＝奥州ハドコモミナスバラシイケシキダガ中デモ)塩釜の浦こぐ船の綱手(綱デヒッパル情景が)―・しも」(古今・東歌)

③みごとだ。あっぱれだ。「きゃつ(＝アイツ)に、―・しう(ウマウマト)謀(はか)られぬるこそ(＝ダマイレタワイ)」〔宇治・巻五ノ五〕

2〔悲し・哀し〕①㋑なげかわしい。心がいたむ。「人の亡きあとばかり―・しきはなし」〔徒然・三〇段〕㋺心配だ。気づかいだ。「主の行く末(＝身の上)の―・しさに、谷に下りて尋ぬれば」〔盛衰・巻一〇ノ一〇〕

②(連用修飾の形で)手いたく。こっぴどく。「安からぬ事こそあれ(＝イマイマシイ事ダナア)。ものもおぼえぬくさり女(＝ワケモワカランガラクタ女メ)に―・しう言はれたる(＝ヒドク言ワレタ)」〔宇治・巻七ノ二〕

③㋑つらい。やりきれない。「猛火(みやうくわ)御堂にかかりければ、(階上ノ僧タチハ)あまりの―・しさに(＝苦シクテタマラズ)、思ひ切りとび落つる者もありけれども、砕けて塵とぞ(＝粉ミジンニ)なりにける」〔盛衰・巻二四ノ七〕㋺(近世語)貧乏だ。やりくりがつかない。「緒方の入れ札、すこしの利潤を見掛けて(＝ネラッテ)」、位詰めになりて(＝ジリジリ損ヲシテ)、内証(＝経営ガ)―・しく」〔西鶴・永代蔵・巻一ノ四〕

P.132

＜コメント＞

「古語辞典」で初めて古典を学ぶ、学習者にとって、一番わかりやすいと極めて高く評価されているのが、長らく絶版であった小西甚一先生のこの「基本古語辞典」だ。ようやく 5 年前に復刊(私も復刊運動に協力させて頂いた一人)、こんな嬉しいことはない。高校生だけでなく、中学生も OK。文学部の学生、社会人の利用に耐える一生ものの辞書。全文を小西先生がお一人で書き上げた、渾身の作品。「をかし」「おもしろし」「かなし」など基本語ばかりなので、一語ずつ読んでも興味が尽きない。

― 2016 年 6 月 25 日(土)　林　明夫記―